



1873年(明治6年)創刊
発行所
信濃毎日新聞社
長野本社 〒380-8546
長野市南条町 657番地
電話(026)
受付 236-3000 編集 236-3111
販売 236-3310 広告 236-3333
松本本社 〒399-8711
松本市宮田 2番10号
電話(0263) 編集 25-2151
販売・広告・事業 25-2153
©信濃毎日新聞社2007年

舞台朗読を始めて四十年ほどになります。一九五三年にNHK東京放送劇団に入り、研修講座で朗読を教わったんです。研修を終えると、ドラマなどに出演しながらラジオやテレビの教育番組で朗読を続けていました。でも、放送マイクの前だと聞き手の反応が分からない。それがもの足りなくて、舞台朗読という世界に挑戦するようになったんです。

研修講座で最初に渡されたテキストが、樋口一葉の「十三夜」でした。私は中学生の時、「たけくらべ」を夢中で演じ、一葉に強ひかれていたんです。一葉は二十四歳で亡くなりましたが、小説のほかにたくさん日記を残しています。東京都内の私の自宅の向かいに、一葉の妹さんの「長男」一家が住んでいて、日記や一葉が教えていた源氏物語などの本を読ませていただいた。一葉の本の間と挟まっていたイチヨウの葉も分けてもらいました。

山崎清談

朗読家

こうだ ひろこ
幸田 弘子さん



女優。「舞台朗読」の表現を確立し公演を続ける。芸術祭優秀賞、芸術選奨文部大臣賞などを受賞。国語審議会委員、共立女子大講師などを歴任。東京都出身、74歳。北佐久郡軽井沢町の別荘で。

一語一語を心に刻み声に

朗読を始めてからしぼくは、取りつかれたように一葉の作品を読み続けました。原文のまま読んで一葉の魅力を伝えたいと願いが。いまは、源氏物語をはじめとする古典や詩、現代文学まで、幅広い作品を取り上げています。

朗読は、作品を読んで読んで読み尽くすうちに、ふっと作家の息遣いを感じ、それを頼りにお客さんに文を伝えるのが理想です。本番の一年前から、読む作品を準備します。舞台朗読の場合、長くても一時間くらいでないとお客さんが疲れてしまうので、なかなか全文は読めません。どの部分を省略したらいいのか。一字一句を吟味する作業も、十分に読み込んでいなければなりません。

作品の解釈が大切ということで、最初から声に出して読んだら朗読になりません。一語一語を心に刻み付け、初めて声に出す。上手に読むことは誰にでもできます。でも、作家の思いを伝えられるかどうかは、解釈と、読み手の心の問題なんです。

素晴らしい文章を、作家が伝えたかったように読むとは、とても難しいことなのです。神奈川県鎌倉市で昨年、宮沢賢治の「よだかの星」を朗読しました。感想を求めると、熱心に聴き入っていた小学生の女の子が手を挙げた。だ、指をさされると何も言えずに泣きだした。ただ、その姿がしっかりと伝わって、感動が言葉にならなかったのね。懸命にやった朗読をちゃんと受け止めてもらえて、うれしかった。

軽井沢町の大賀ホールでも二年前から、堀辰雄さんの作品を朗読しています。夫人の多恵子さんが応援してくださっていることが、これからも続けていきます。

戦後しばらくまでは、声を出して文章を読むのは当たり前で、近頃小学生は朗読の宿題があり、近所で読む声が聞えていた。舞台朗読を始めてからは、井伏鱒二さんや武者小路実篤さん、井上靖さん、と、たくさんの方の文章の書き方で直接、作品のお話を聞かせていただきました。いい時代に朗読と巡り合えたことを感謝しています。

今は日本語が乱れていると言われます。でもね、これだけ国際化が進めば、言葉が変わるのも当然でしょう。古典や明治期の作家の文章を読んでみたい、作家の思いを感じてみたいという若い人も多いです。だから心配してません。作家が命懸けで残した文学という宝を受け継いだ上で、変わっていくのだと思います。

みんな声を出して文章を読んでもいい。自分の書いた文章でも、リズム感を確認できるし、何より楽しい時代です。子どもの数が減っていく時代ですから、そんなゆとりを持って、若い人を育てていってほしいですね。(今年の山崎清談は終わります)